

第二部 ミミズ酵素・ルンブロキナーゼが血栓を溶かす 第一章 ミミズとの出会い

博士は宮崎医科大学（現、宮崎大学医学部）に生理学の教授として就任するとともに、動物実験施設を担当する事になりました。実験用の動物を飼育している為、廃棄物の処理が大きな問題でした。

廃棄物には、大量の動物の毛が含まれていて、そのまま下水処理場に放流すると、いっぺんに流れて、処理する機器が動かなくなる危険性がありました。

そこで、動物施設の廃棄物をフィルターでろ過し、液体部分のみを下水処理場に流すことで、大量の毛が下水処理施設で詰る問題は解決しました。

しかしながら、ろ過で残った大量の毛を含んだ廃棄物の処理の問題が有りました。焼却処理という方法では、水分を含んだ糞尿処理に要する重油代は動物施設に配分されている年間予算と同額位にもなります。1年間の予算をすべて糞尿の焼却処理に使う訳にはいかず、困り果てていました。

ちょうどその頃、アメリカから生ごみ処理の為に輸入されたルンブルクスルベルスと云うミミズによって、ネズミ講ならぬミミズ講が事件になっていました。ルンブルクスルベルスを元売り会社から50円で買い取り、1000倍にも増えるミミズを10円程で引き取ってもらう、と云う儲け話です。このミミズがごみ処理に役立つ事や、糞土が農作物の生育に効果が高く土壌改良にもよいと云う宣伝文句が、多くの農家の方をミミズの養殖の投資話に乗せ、養殖が始まりました。

しかし実際にはミミズを買い取る事無くミミズの元売り会社は雲隠れをしてしまいました。養殖された大量のミミズは、まずは釣り餌となりましたがそれだけでは処理できないほどに増えていました。宮崎県内には、増えたミミズを抱えて困っている農家がたくさんありました。

そこで、博士は増えたミミズを大学の廃棄物処理に役立てる事を思いつきました。しかも困っている農家の方たちを助ける事にもなるのではないかと考えました。

ミミズ講の事件で、ミミズの有効性についての宣伝がされていましたが、これは決して偽りでは有りませんでした。ただ販売方法が詐欺まがいであった事で事件になっただけで、ミミズにはさまざまな有効性が有りました。

従来日本に生息するミミズは、秋になると卵を産んだ後、死んでしまうか冬眠してしまいます。ですからこのミミズは年間を通じての生ごみ処理には不向きです。

しかしながら、ルンブルクス・ルベルスは冬眠をしない為、生ごみ処理にはうってつけのミミズでした。また、確かにミミズの糞土は土壌改良にとっても効果が有り、更に博士の専門分野である血栓症のために有効な成分を持っている事もわかりました。これが大発見となったのです。

昨今、地球環境問題がクローズアップされていますが、ミミズはまさに地球環境を守るエコ動物であり、土壌を健康にしてくれる動物なのです。

博士は医師ですから、人の健康についても考えています。ふとしたきっかけで出会ったミミズは、土壌を健康にして、更に人の血液も健康にする動物であるとする研究がなされる事となりました。

ルンブルクスルベルスとの出会いは、実験動物の毛や糞尿の処理を考えた末にたどり着きました。人助けにもなったそんな事件の上にあったのです。ミミズと聞くとちょっと気味が悪かったのですが、こんなにも頑張って地球を良くしてくれていたのです。今回は、ミミズを利用した排泄物処理の実験のお話です。